

□1月14日礼拝説教(隅野徹牧師短縮版)「ただ恵みによって召し出される私たち」(ガラテヤ1:11~24)

神からの幻によって異邦人伝道の召しを受けた後、パウロはアラビア半島に退いて、その後回心の地であるダマスコに戻ったと書かれています。その後エルサレムに行き使徒たちと会い、パウロはケファ(ペトロ)と主の兄弟ヤコブだけにあったのだという言葉を使っています。エルサレムの初代教会で2人しか会わなかったというよりも、パウロと会ってくれたのはバルナバ以外に2人しかいなかった。それだけ嫌われ、誤解されていたと読むべきではないかと私は思います。そのことを頭に入れて、続く20節から24節を読んでみましょう。

シリア・キリキヤ地方の教会の人たちも、もともと知り合いというよりは「昔、自分たちを迫害してきた、あのパウロ」という感じで警戒のまなざしを向けていたことでしょう。しかし23節、この地方の人々は「かつて我々を迫害した者が、あの当時滅ぼそうとしていた信仰を、今は福音として告げ知らせている」といっているのです。

この言葉は簡単に発せられたものではありません。パウロにとって長い長い備えの期間がありました。紆余曲折がありました。パウロがキリストを受け入れて一生懸命祈り備えても、それでも人々から全く受け入れてもらえない。初代教会のメンバーでさえ、多くは受け入れ拒否だった。そこを通ったあとの、この23節の言葉なのです。

24節の「わたしのこと」つまりパウロのことで相手が神をほめたたえたというのは、迫害者が劇的に真反対の生き方をしたからだけではない、と私は考えます。キリストと出会い劇的に変えられた後、誤解されたり苦しいことが続いた。しかしそれでもキリストと共に歩む、新しくされた生き方を曲げることがなかった。だからこそ神がほめたたえられるのです。私たちを通して神がほめたたえられることを祈り願っています。(終)